令和６年度

へき地・小規模校教育研究発表会

第 27 回研究発表会資料

研　究　主　題

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子供の育成」
～児童・生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実を目指して～

日時：令和６年８月１日（木）　午後１時 30 分から午後４時 30 分まで
（受付開始　午後１時）
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（カルチャー棟　小ホール）

目　　次

大島町立さくら小学校　研究発表資料　・・・・・・・・・・・・・・・・1

檜原村立檜原中学校　　研究発表資料　・・・・・・・・・・・・・・・10

へき地・小規模校の教育について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

青梅市教育委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

檜原村教育委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

奥多摩町教育委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

東京都教育庁大島出張所　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

東京都教育庁三宅出張所　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

東京都教育庁八丈出張所　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

東京都教育庁小笠原出張所　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

自分の世界を広げようとする児童の育成
「大島まるごと学校」
―大島で学ぶ・大島を学ぶ・大島から学ぶ―

大島町立さくら小学校

Ⅰ　地域及び学校の概要

１　地域の概要

大島は、都心から南に約 120Km に位置し、東京・竹芝客船ターミナルから高速ジェット船で１時間 45 分、調布飛行場から 25 分と伊豆諸島では、最も都心に近い位置にある。令和６年度の人口は約 7,000 人で、小学生約 300 人、中学生は約 130 人となっている。

岡田港

伊豆大島ジオパーク
OSHIMA ISLAND
GEO PARK

伊豆大島は、島の面積 90.76 ㎢の約 97％が国立公園に指定されている。島を取り囲む海洋と活動的な火山に由来する特異な自然景観や生物・生態系が大切に守られており、住民も来島者もその豊かな自然を味わい楽しむことができる。2010 年９月には「日本ジオパーク」に認定され、伊豆大島ジオパーク推進委員会を中心に様々な活動を行っている。

大島町には小学校が３校あり、それぞれ、大島の玄関口である岡田港と東京大島かめりあ空港を擁する北部、町役場や東京都大島支庁などの行政機関がある元町地区を中心とした中部､波浮港をはじめとした歴史のある観光地を擁する南部の３つに対応している｡そのうち、さくら小学校の学区域は、北部に属し、北の山地区、岡田地区、泉津地区の３つの地域から成り立っている。

北の山地区は、大島で唯一の飛行場を有する地域である。大島の西側に位置し、三原山、富士山、伊豆半島が一望できる環境にある。この地域は、八丈島等の他島及び本土から転居してきた人が多い。また、戦後、この地を開拓し、住まいを造り、生活の基盤を独力で作り上げた人々の住む地域でもある。

岡田地区は、大島の北岸に位置し、天然の良港である「岡田港」がある。ここを中心として発達した集落は、下、上、南山、山に分かれ、特に下は港に近く、旅館やみやげ物店が立ち並び、元町とともに大島観光の基点となっている。また、漁港もあり、南部の波浮港と並び島の漁業の基地となっている。風早崎には大島灯台があり、乳が崎の両側は、野田の浜とゴイシ浜があって、夏は海水浴場となっている。

泉津地区は、大島の北東部に位置し、財産区をもち、日本最古といわれる大島桜株や海浜植物郡叢、椿トンネル、海食崖が作った潮吹きの鼻など、島内で最も自然が残されている地域である。また、自然洞窟を利用した役の行者窟や岩陰住居遺跡、江戸期に作られたという鉄砲場など古代から中世までの遺跡が存在し、観光の名所ともなっている。

どの地域も受け継がれてきた伝統や文化を大切に守っている。また、地域での行事や活動も盛んである。「子供は島の宝である」ということが受け継がれていて、地域・家庭・学校で共に育てていこうとする意識が特に強いという特色を有する。

2　学校の概要

(1) 児童数（令和６年４月１日現在）　（人）

学年	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	合計
児童数	12	12	18	12	16	21	91

(2) 教職員数（令和６年４月１日現在）　（人）

職名	校　長	副校長	主幹教諭	主任教諭	教　諭	主任 養護教諭	事務主任	合計
教職員数	1	1	1	5	4	1	1	14

(3) 学校の特徴

本校は、平成 17 年度に北の山地区の北の山小学校、岡田地区の岡田小学校、そして泉津地区の泉津小学校が統廃合されてできた学校である。木造校舎で、あたたかい木のぬくもりを感じることができる環境である。普通教室は、オープンスペースとなっており、児童は教室を広々と使っている。

校舎

また、グラウンドを挟んで大島町立第二中学校があり、多くの卒業生が進学する。小中連携を活発に行っており、小中合同運動会は地域を巻き込んで盛大に行われている。

異学年交流も盛んであり、入学した１年生を６年生があたたかく、丁寧に見守っている。校舎内で困っている下級生がいると上級生がすぐに駆け寄り、助ける姿が見られ、「上級生になったら下級生のお世話をする」というのがよい伝統となっている。

本校の校章は、学区域である３地区に港、すなわち東京大島かめりあ空港（北の山地区）、岡田港（岡田地区）、泉津港（泉津地区）をもつことから、地域に根ざした教育活動を展開するとともに、常に外に開かれ、子供たちに輝かしい未来があることの願いを込め、中央にいかりのマークを入れ、さらにさくら小学校の頭文字Ｓの背景にさくら小学校のシンボルである桜の花びらを配置してデザインされている。

校章

Ⅱ　研究主題の設定理由と研究のねらい

１　研究主題の設定理由

本校では、教育目標を「やさしさ　つよさ　たくましさのある　さくら小の子」と設定している。「やさしさ」では共生する力、「つよさ」では学びに向かう力、「たくましさ」では生活実践力をそれぞれの重点と捉え取り組んでいる。児童の多くは、優しさにあふれ、困っている児童がいると自然と手を差し伸べることができる。また、小さいときから共に育っているため、互いの思いや気持ちを言葉で表さなくても理解し合える。児童の多くは島内の公立高校に進学し、その後、島を出て進学、就職していく。島内に残ったり、戻ってきたりする場合もあるが、多くは島外で暮らしており、大島町は緩やかに人口が減少している。そのような中で、本校では、予測困難な時代における持続可能な社会の担い手として、児童に「自ら未来を切り拓く力」を身に付けさせ、「自信をもって生きる力」を養いたいと考えている。そこで研究テーマを「自分の世界を広げようとする児童の育成」と定め、「大島まるごと学校～大島で学ぶ・大島を学ぶ・大島から学ぶ～」をキャッチフレーズにして研究を進めることとした。

２　研究の概要

本校では、研究テーマを基に授業研究と教員研修の２本立てで研究を進めている。

授業研究では、平成 31 年度から令和３年度までは、研究テーマを「楽しい学びの創造　～学びを自分事としてとらえる児童の育成～」と設定し、生活科・総合的な学習の時間の研究を行ってきた。児童、学校、地域の実態に応じた各学年の探究課題を設定することで、カリキュラム・マネジメントを充実させることができた。

令和４年度からは、他教科等にも範囲を広げ、研究テーマを「自分の世界を広げようとする児童の育成」と設定した。各教科等・領域で「①個別最適な学び・協働的な学びの一体化」、「②各教科等の見方・考え方を働かせる学びの実現」を目指し、更にカリキュラム・マネジメントの改善を図っている。児童の変容を見取るために、単元を通した授業観察などを行っている。

また、地域の特色を生かすために、平成 31 年度から「大島まるごと学校」をキャッチフレーズにし、地域・島内で活躍されている方を「ふるさと先生」(GT) として各教科等の学習に招くほか、児童が学習したことを地域の方に広く発表する機会（学習発表会・ジオパーク研究発表会）を設けたりすることで、地域に根ざした教育活動となるよう工夫している。昨年度は、東京都教育委員会より地域人材・資源活用推進校に指定され、取組を発表した。

教員研修では、全教員が大島に関するテーマを設定し、１年間かけて研究をしている。地域の方にインタビューをしたり、図書館や郷土資料館で調べたり、自分で実際に体験してみたりして、大島のことをさらに深く知ることができるようにしている。その上で、教員が、主体的に学んだことを授業づくりに生かすとともに紙面にまとめ、学習発表会や岡田港の客船ターミナルへの掲示を行うほか、伊豆大島ジオパーク学習発表会で発表を行っている。

Ⅲ　研究の内容

１　研究の構想図

２　研究の実際

(1) 授業研究

ア　授業実践１

小学校　第３学年　総合的な学習の時間　「伝統　～大島の伝説を調べよう！～ 」

育成を目指す資質・能力

地域の伝統から問いを見いだし、その解決の手段を考え調査し、必要な情報から考え、根拠をもとに表現する力。

【総合】地域に伝わる伝承について知り、学習課題をつかむ。

【総合】大漁節について調べたことを２年生に発表する。

【体育科】地域の伝統の踊りを学ぼう。

地域に伝わる踊りを伝承している方に踊りを教えてもらう。

【概要】

①地域に伝わる伝承・祭礼等について、教えていただき、地域の文化について学習課題をつかむ。

②地域に伝わる踊りについて、その意義と意味について理解する。

③実際に大漁節という踊りの動作を指導していただき、踊れるようにする。

④運動会で、地域・保護者に向けて発表する。

【地域に伝わる伝承を知ろう】

【 大漁節を踊ろう 】

【総合】「大島の浜×伝説について調べてみよう」

浜の特徴とそこに伝わる伝説について、地域の方とフィールドワークを行う。

【概要】

①北部地域にある浜について知っていること・知りたいことを出す。

②それぞれの浜に出掛け、地域の方とフィールドワークを行う。

【秋の浜について知ろう】

学習発表会
「伝統文化ミュージアム」

イ　授業実践２

小学校　第５学年　総合的な学習の時間　「わくわく発見！大島の食」」

育成を目指す資質・能力

地域の食のよさと課題及びそれに携わる人々の願いを知り、自分事として課題解決に取り組む力。

【総合】「わくわく発見！大島の食」ガイダンス

【総合】「島の自然が生む塩づくり」

製塩所の経営者に塩づくりを教えていただく。

【概要】
①自然体験教室に合わせて、地域で製塩所を経営する方を講師に招き、塩づくりの方法を学ぶ。
②実際に海水を汲みに行き、自分たちが汲み取った海水を使って塩づくりを行う。
③自分たちの作った塩を使って、調理実習をする。

【 塩をつくろう】

【総合】「食べ物のありがたさ～大島町の給食から考える～」

【総合】「給食の残菜を減らし隊」

給食センターの栄養士さんや食材を納入する農家の方から話をうかがう。

【概要】
①栄養士さんの話を聞いたり給食センターに見学に行ったりして、給食に携わる方々の思いを知る。
②残菜調べをして、残菜率を減らす取組をする。
③大島ならではの食材を作っている方々の話を聞く。

【 給食センターの見学】

【総合】「大島の食材のよさ見つけ隊」

料理人の方と大島の食材を使ったオリジナルレシピを考える。

【概要】
①大島の食材を使ったオリジナルレシピを考える。
②レシピ本にまとめる。
③地域の直売所で、販売するための準備をする。

【オリジナルレシピを考えよう】

学習発表会
「大島の食」×「ありがとうの気持ち」伝え隊

(2) 教員研修

ア　さくらまるごとカフェ

○ 目的

・地域の方とさくら小の教員が交流することで、「大島のもの・こと」と「大島に住む地域の方々」と「子供たちの学び」をつなげる。

○ 方法

（ア）地域のコーディネーターと研究主任が実施方法について検討

（イ）チラシを作成し、地域に配布

（ウ）参加者リストを作成し、事前アンケートを実施

（エ）まるごとカフェの実施

教員と地域の方々との話し合い

○ 参加者のアンケート

・貴重な取組だと思う。開催には、学校のエネルギーもかかると思うが、さくら小学校から始まり、続いてきたこの取組は、大島の他校にも、地域の未来づくりの核としての大切な明るい取組だと思う。校長や先生たちが代わっても伝統として継続していっていただきたい。 ・大島の事を知っていただいた上で、先生方の経験を子供たちに伝えていただけたらと思います。故郷を誇りに思う事・他者を思いやる事・物を大事にする事は別々の事のようですがこれらすべてつながっていることだと思います。子供たちの学習にとどまらず、生活や生き方を考えるきっかけに行く行くはなればと思います。

○ 授業への活用例

ジオガイドの方	・自然教室での星空ガイド（５年生） ・海浜教室での生き物紹介（１、２年生）
塩工場経営の方	・塩づくり体験（５年生）
農家の方	・さつまいもの苗植え（１、２年生）
海外経験のある方	・外国の文化の紹介（５、６年生）
大島に移住された方	・大島の魅力についてのインタビュー、職業体験（６年生）
町役場観光課 ジオパーク推進委員会	・三原山フィールドワーク（自然・防災など） ・海辺の花園再生プロジェクト

イ　大島について理解を深めるための教員研修

○ 目的

・大島町の教員として大島のことをよく知ることで、授業づくりに役立てる。

・さくら小の教員として、地域の方とのコミュニケーションを図り、学校と地域との連携を深める。

○ 流れ（令和６年度予定）

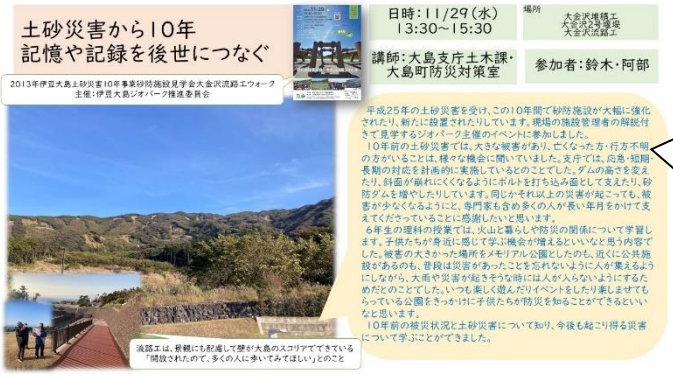
	日時	内容	場所	講師
①	４月４日	遠足で行く予定の遊歩道を歩く。	大島公園海岸遊歩道	本校教員 （ジオガイド資格者）
②	６月 19 日	三原山自然散策	三原山	伊豆大島ジオガイド
③	６月 26 日	個別で設定	個別で設定	個別で依頼
④	９月 18 日			
⑤	11 月６日			

○ 発表方法（令和５年度）

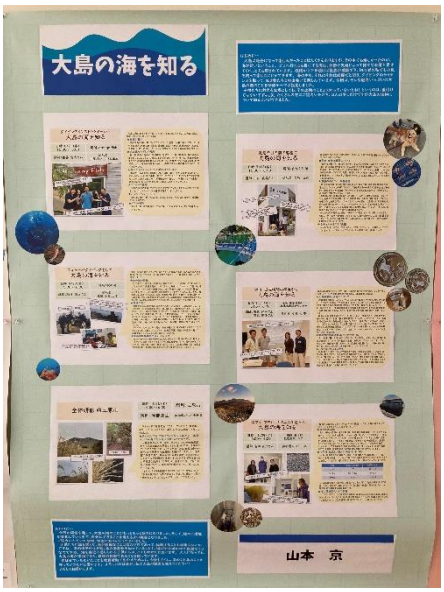
（ア）　学習発表会での展示【２月３日（土）】

（イ）　伊豆大島ジオパーク学習発表会【２月 10 日（土）】

（ウ）　岡田港船客待合所での展示【３月１日（金）～３月 28 日（木）】

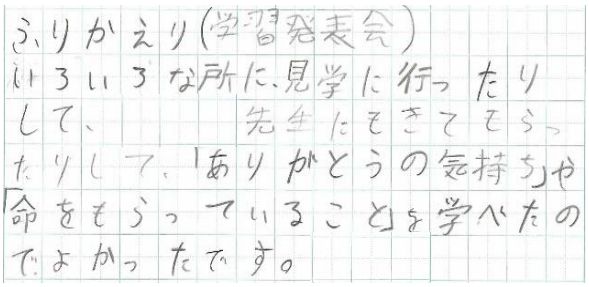


各自で研修した内容を毎回 1 枚にまとめるようにします。インタビューした内容や学習に生かせそうなことを書いていきます。



1 年間、研修で学んだことを各自で模造紙 1 枚にまとめます。学習発表会や岡田港客船ターミナルで展示します。

学習発表会では、児童だけではなく、教員グループも地域の方々に発表しました。


ふりかえり（学習発表会）
いろいろな所に見学に行ったり
して、　　先生たちをきてもら
ったりして、「ありがとうの気持ち」や
「命をもらっていること」を学べたの
でよかったです。

学習の振り返り

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1) 授業研究について

地域を生かした教育について、年間指導計画に位置付け、カリキュラム・マネジメントを進めることで以下の児童の資質・能力を育成することができた。

・児童は、実際のものに触れたり、専門家の方から話を聞いたりする体験的な学習を多く行うことで、自らの考えを広げ理解を深めることができた。また、学んだ内容について自信をもって地域に発信することができた。

・児童は、自分たちの住む地域（島）について理解することで、郷土愛を深めたり、生命を尊重する心を育んだりすることができた。

・総合的な学習の時間で学んだことを新聞形式にまとめて発表する経験を、他の教科等の学習に生かすことができた。

養蜂家の　　さんにインタビュー

5年

養蜂家の大変さ

ミツバチは、雨や風、台風などの天候の影響が特に大変です。それに、ちゃんと世話をしないと出ていくし、ハチを増やすのは大変です。なのに、一匹で小さじ一杯分しかハチミツが取れません。失敗することが多いため、やめちゃう養蜂家もたくさんいます。しかし、　さんのハチミツは好評で、買ってくれた人からもう一回ほしいという声があるそうです。

ハチミツの効果

むだ巣は、むだな巣という意味ですが、ハチミツがたくさん入っています。このむだ巣を実際に食べさせてもらいました。一匹で小さじ一杯分しかハチミツが取れないのに、たくさんあって、ハチの力はすごいなと思いました。ハチミツの効果は・ダイエット・疲れりがはやくなる・記憶力アップです。そのほかにも、ハチミツは、いろんなレシピがあります。みなさん、ハチミツの効果を知って身近な食材の一つにしてみてください。

学びをまとめた新聞

(2) 教員研修について

・教員研修を行うことで教職員が自分の勤める地域についての理解を深め、地域の財を活用した学習を展開することができた。

・学習に携わった地域の人が学校の教育活動に興味をもつようになり、地域・学校の連携を深めることができた。

2　今後の課題

・学んだことを自ら整理し、地域に発信する学習活動を一層充実させるため、総合的な学習の時間を中心に、学年の発達段階に応じた整理・分析・発信の方法を検討していく必要がある。

・地域の「ひと・こと・もの」は多岐に渡るので、それらについて年間指導計画に位置付けながら整理し、地域に根ざした教育の更なる充実に向け、今後も活用できるようにしておく必要がある。

・教員の異動があっても、地域を生かした教育活動を継続していけるよう、教員研修の大島に関する資料等を整理し、ガイダンス等に活用していけるようにする。

檜原村の今と未来に貢献する生徒の育成

―総合的な学習の時間を中心とする“つなごう未来の檜原プロジェクト”を通して―

檜原村立檜原中学校

Ⅰ　地域及び学校の概要

１　地域の概要

〈豊かな自然に囲まれた檜原中学校〉

西多摩郡檜原村は、多摩川最大の支流「秋川」の源流にあり、神奈川県や山梨県と接し、島しょ部を除き、東京都で唯一の村である。また、村の大部分が秩父多摩甲斐国立公園に指定されており、緑と清流に囲まれた自然豊かな山間地となっている。人口は、現在 1,986 人（2024 年２月 13 日現在）、面積は、105.41 平方キロメートルで村の周囲は急峻な山嶺に囲まれ、全体の９割以上が林野である。このような地域の檜原村では、日本の滝百選に選ばれた「払沢の滝」、都指定の天然記念物「神戸岩」、地域の木育活動の推進地である「檜原森のおもちゃ美術館」、登録有形文化財「髙橋家住宅」など、多くの魅力的な自然の風景を満喫できる。村内には、小学校が１校、中学校が１校あり、平成 23 年に、小中一貫教育校檜原学園檜原小・中学校を開園した。檜原村教育委員会では、村全体で「檜原村の郷土に根ざし、ふるさとを大切にする」ことを目標に、「９年間の系統性・連続性を意識した指導」「確かな学力を身に付けるための学びのカルテの活用」「小中指導交流の充実」「ＩＣＴ教育の充実」「外国語教育の充実・国際派遣事業」「郷土檜原村についての学習」を推進している。

２　学校の概要

〈年に一度開かれる郷土芸能鑑賞会〉

檜原村内全域を学区域とし、バス通学者が約９割、自転車通学者が約１割である。今年度の生徒数は 23 人、教職員数は 17 人であった。檜原学園の中学校では、生徒が日本人としての誇りや存在意義を感じることができるよう、村内各地域と連携した「郷土芸能鑑賞会」や、ウィーンから音楽家を招き、「子ども国際交流音楽祭」を開催したり、海外派遣事業へ積極的に参加したりするなど、郷土や日本の伝統・文化及び国際理解教育を推進している。また、職場体験にも力を入れており、地域との交流や職業人講話を積極的に行うなど、一人一人の生徒を大切にし、寄り添ったきめ細やかな指導を行うことで、将来、自らの人生を自分で切り拓く力を育成するためのキャリア教育が特色である。

Ⅱ　研究主題の設定理由と研究のねらい

１　研究主題の設定理由

檜原中学校では、檜原小学校とともに小中一貫教育に力を入れており、令和４年度に総合的学習の時間を中心とする系統的な学びの流れをプロジェクトとして具体化させた。このプロジェクトの名称が、「つなごう未来の檜原プロジェクト」である。この名称は、郷土を愛し、誇りに思う子供の育成を図っていきたいという、学校、保護者や地域の願いを込めて名付けられた。そして、このプロジェクトの最終的な目標として、「檜原村について知り、深く理解し、檜原の今と未来に貢献できる」という生徒像を掲げた。

本校の生徒は、幼少期から多くの大人に温かく見守られて生活し、小規模ながら小中一貫教育を推進しているため、友情や相互理解、地域のつながり、郷土愛などの豊かな情操が育まれてきた。

一方で、全学年１学級という小集団であるため、授業に対して意欲的に取り組んでいるものの多様な他者と協働して学び合う場面が少ないという実態がある。また、授業改善のための話し合いで、令和４年度及び令和５年度の全国学力・学習状況調査の結果を分析したところ、資料等から必要な情報を読み取り、自分の考えをより分かりやすく相手に伝える力を更に伸ばしていくことが課題として挙がった。

これらの課題を解決するため、探究的な学習を進める上で、「学習マップ」などを活用して思考を深め、協働して課題の設定及び解決にあたる学習である「檜原メソッド」を行うことにした。「檜原メソッド」は、以下の「学びのステップ」で進んでいく。

①　地域の自然・産業・文化や人々に触れ、檜原村を知る。
②　他地域との関係や、歴史等の相違点を学び、檜原村を深く理解する。
③　檜原村の持続可能な未来像を見据え、現在とのギャップから問題点を見いだし、課題を設定して策を考え実行する。

この学びを９年間の系統性・連続性をもって積み上げていけば、問題発見・解決能力、情報活用能力、コミュニケーション能力、表現力、論理的思考力を育成でき、よりよく課題の解決が図られ、「確かな学力」が着実に身に付くであろうと仮定した。

そして、総合的な学習の時間において、実社会・実生活の中の課題の探究を通して、自己の生き方を問い続ける固有な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行い、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することにした。

以上のような背景から、今年度の檜原村立檜原中学校の研究主題を「檜原村の今と未来に貢献する生徒の育成」に設定した。

２　研究のねらい

プロジェクトのゴールである「檜原村について知り、深く理解し、檜原の今と未来に貢献できる」生徒の育成を目指し、総合的な学習の時間を中心として、次の視点で、研究を進めていく。

(1) 視点１　「檜原メソッド」(p. 13 研究構想図参照)を活用した探究プロセス

檜原中学校では、令和４年度に総合的な学習の時間の名称を、独自に「つなごう未来の檜

原プロジェクト」とし、より地域貢献に的を絞った探究的な学習を行ってきた。このような探究的な学習のねらいは、小規模校である強みを生かし、生徒一人一人をきめ細かに教職員が支援し、より実現性の高い課題解決力を生徒に身に付けさせることである。

この探究的な学習では、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」といった探究のプロセスを明示し、学習活動を発展的に繰り返していくことを重視している。そこで、本校では、そのプロセスを「①主題の設定→②情報収集・分析→③知識・理解の深化→④問題の発見→⑤課題の発見→⑥解決に向けた情報収集・分析→⑦解決策の提案・実行→⑧振り返り」と細分化し、それぞれのプロセスにおいて、高めたい資質・能力や各教科の関連性について明確にすることで、カリキュラムマネジメントの実現を図っていく。また、本プロセスは中学校だけでなく、小学校から義務教育９年間の系統性をもたせることで、資質・能力の向上だけでなく、よりよい檜原村の未来を考えることについての着実な積み上げが期待されるところである。

(2) 視点２　「学習マップ」の活用

「学習マップ」とは、思考ツールであり、生徒から出てきた自由な思考、アイデアや情報の流れを、中心となる概念から分岐させる形で描写した図である。探究的な学習の過程において、体験したことや収集した情報を、言語により分析したりまとめたりすることは、自らの学びを意味付けたり価値付けたりして自己変容を自覚し、次の学びへと向かうために特に大切にすべきことである。また、複数で話し合い活動を行う際に、「学習マップ」をより積極的に活用することで、個人の考えが双方向に可視化され、意見の整理につながり、協働して課題を解決するための学習活動にも役に立つ。

そのため、学年の実態に応じた「学習マップ」を作成し、段階に応じて積極的に活用することで、生徒がより主体的に思考ツールを選択し活用できるようにしていく。

(3) 視点３　協働的な学びを発表する場の設定

探究的な学習の質を高めていくためには、他者と協働して課題を解決しようとする学習活動を行うことである。そのため、各単元において、相手に分かりやすく説明したり、他者の意見に触れたりする場を、意図的に大きく分けて３点設定した。

- 異学年編成のグループ活動･･･小規模校の利点を生かし、異学年同士の交流を意図的に行うことで、生徒たちは多様な情報を収集し、自分の考えを広げていく。
- インタビュー活動･･･自分の課題を解決するために、その道の専門家や、現地でのインタビューを行うことで、自分の考えを深めたり、学習方法の修正を図ったりしていく。
- 全体に向けた学習の発表会･･･生徒たちが、自らの学びを小学生や異学年、地域や保護者へ向けて発表するといった場を設定することで、実生活で生かせる知識及び技能の習得を図っていく。また、発表の場や、発表に対する質疑に受け答えるという場面を設定することで、相手意識や目的意識が生まれるだけではなく、更なる学びに向けた意欲が引き出されることが期待される。

９年間の系統性をもって、他者と協働して課題を解決しようとする学習活動を展開していけば、着実に学習の定着度や質の向上につながると考えられる。

Ⅲ　研究の内容

１　研究の構想図

学園教育目標	学びをつないで、持続可能な社会の担い手を育てる
学校教育目標	学び考える人　　心の豊かな人　　たくましい人
研究主題	檜原村の今と未来に貢献する生徒の育成 ― 総合的な学習の時間を中心とする “つなごう未来の檜原プロジェクトを通して”　―

つなごう未来の檜原プロジェクト

【探究的な学習】児童・生徒自らが主題を設定し、情報を収集・整理・分析・意見交換・協働して進めていく学習活動。

【檜原メソッド】探究的な学習を進める上で、学習マップなどを使用して思考を深め、協働して課題の設定及び解決にあたる学習。

各教科で身に付けた力

総合的な学習の時間・特別活動・行事
【探究的な学習】【檜原メソッド】

＜檜原メソッド　学びのステップ＞

1. 地域の自然・産業・文化や人々に触れ、檜原村を知る。
2. 他地域との関係や、歴史等の相違点を学び、檜原村を深く理解する。
3. 檜原村の持続可能な未来像を見据え、現在とのギャップから問題点を見いだし、課題を設定して策を考え実行する。

視点１
檜原メソッドの探究プロセス

視点２
学習マップの活用

視点３
協働的な学びを発表する場

主題の設定 → 情報収集・分析 → 知識・理解の深化 → 問題の発見 → 課題の発見 → 解決に向けた情報収集・分析 → 解決策の提案・実行 → 振り返り

プロジェクトのゴール（目指すべき児童・生徒像）

檜原村について知り、深く理解し、檜原の今と未来に貢献できる

具体的に身に付けたい力

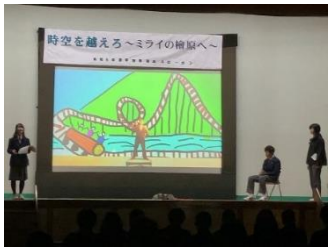
問題発見・解決能力、情報活用能力、コミュニケーション能力、表現力、論理的思考力

２　生活科・総合的な学習の時間の取組内容（小中一貫教育校檜原学園）

学年	取り組む分野	主に使用する時間	具体的な取組内容
１年生	檜原のよさ	ひのはら科（５時間）＋生活科	「自然」や「人」との関わりから、檜原のよさを身近に感じ、関わる。 ・アサガオを育て、学校(檜原)の美化に貢献する。
２年生			「自然」や「人」との関わりから、檜原のよさを身近に感じ、関わる。 ・緑のカーテンを村役場につくろう。 （ツルレイシやゴーヤを村役場に植え育てる）
３年生	檜原の特産物、自然	総合的な学習の時間（70 時間）＋行事関連	檜原の特色やよさが分かり、人々の努力や工夫によってそれが支えられていることを学ぶ。 １．檜原の特産品 ２．檜原の自然 ３．ムラサキの栽培 ４．檜原を紹介
４年生	檜原の自然環境福祉		檜原の特色やよさが分かり、人々の努力や工夫によってそれが支えられていることを学ぶ。 １．檜原での SDGs（ゴミ問題） ２．檜原と都心との比較（自然、環境の視点で） ３．福祉体験
５年生	檜原の産業生物		檜原の特色やよさについて、さらに理解を深め、檜原の理想像を探る。 １．檜原の自然体験（農林業） ２．檜原と千葉県岩井との比較(産業の視点で) ３．西多摩の野鳥
６年生	檜原の歴史自然文化		檜原の特色やよさについて、さらに理解を深め、檜原の理想像を探る。 １．檜原の歴史についての調査 ２．檜原と日光との比較(歴史、自然、文化の視点で) ３．檜原の森林
７年生	檜原の未来問題と課題について	総合的な学習の時間（50 時間）＋行事関連	檜原の特色やよさについて、さらに理解を深め、檜原の理想の姿を想定し、問題と課題を探る。 地域の人々に触れ、檜原村を知る。 １．檜原と他地域との比較 ２．村内の職業について探究する。 ３．檜原の問題と課題についての探究
８年生		総合的な学習の時間（70 時間）＋行事関連	檜原のよさと問題と課題を探究し、檜原の理想像から檜原の未来を考え、檜原への貢献策を模索する。 １．檜原と他地域との比較 ２．村内での職場体験学習、上級学校調査 ３．檜原の課題と解決策についての探究
９年生			檜原のよさと問題と課題を探究し、檜原の理想像から檜原の未来を考え、檜原への貢献策を模索する。 １．檜原と他地域との比較 ２．地域学習 ３．９年間のまとめ

３　研究の様子

<table>
<tr><td>7
年
生</td><td rowspan="3">檜原の未来
問題と課題
について</td><td>総合的な学習の時間
（50 時間）
＋行事関連</td><td>地域の自然・産業・文化や人々に触れ、檜原村を知る
１．檜原と川越との比較
２．村内の職業について探究する
３．檜原の問題と課題についての探究
※学習マップ
※資料の活用
※協働学習、発表

【今年度の発表内容】
「檜原ふしぎ発見!!」というクイズ番組形式の劇を行い、檜原と他地域との比較から学んできた檜原村の問題と課題を発表した。</td></tr>
<tr><td>8
年
生</td><td rowspan="2">総合的な学習の時間
（70 時間）
＋行事関連</td><td>他地域との関係や違い及び歴史を学び、檜原村を深く理解する。
１．檜原と横浜との比較
２．村外での職場体験学習、上級学校調査
３．檜原の課題と解決策についての探究
※学習マップ、思考ツール
※資料の活用
※協働学習、発表
 
【今年度の発表内容】
「If ストーリー『檜原村が世界的観光地だった世界線』」と題し、職場体験や校外学習を通して学んできた檜原村の利点や課題を基に、理想の檜原村像を紹介番組形式で発表した。</td></tr>
<tr><td>9
年
生</td><td>檜原村の持続可能な未来像を見据え、現在とのギャップから問題点を見いだし、課題を設定して策を考え実行する。
１．檜原と京都・奈良との比較
２．地域学習（檜原村起こし）
３．９年間のまとめ
※学習マップ
※資料の活用
※協働学習、発表

【今年度の発表内容】
『檜原村救出大作戦～30 年後のふるさと檜原村～』というタイトルの劇を行った。廃村の危機を救うために緊急村民会議を開き、村の存続のためのアイデアを出し合うという設定で、修学旅行中に訪問や取材をした課題解決の方策を発表した。</td></tr>
</table>

地域貢献

９年生では、９年間の小中一貫教育校の集大成として檜原の未来を探究し、30 年後の檜原村像を描いた。学習発表会では、自分たちで作成した「檜原未来パンフレット」を来場者に配布するとともに、村役場に寄贈した。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果

(1) 視点１　「檜原メソッド」を活用した探究プロセス

・細分化したプロセスにおいて、高めたい資質・能力や各教科の関連性について明確にすることで、教員は各プロセスで生徒の取組状況を詳細に評価するようになった。

・小規模校である強みを生かし、生徒一人一人をきめ細かに教職員が支援することで、「村民にインタビュー調査を行う」「村外に出てフィールドワークを行う」「檜原村と似通った自治体と比較する」など、生徒個人が学習の到達目標を設定し、当事者意識をもって学習に臨む姿が、授業の様子や発表の様子等から見えた。

・地域貢献に的を絞った探究的な学習を行うことで、第８、９学年の生徒からは「檜原村に生かせられるような、他の自治体の取組を学ぶ」という檜原村の未来の担い手としての当事者意識を強く自覚した声が挙がった。

・総合的な学習の時間のまとめとして、年度末に実施している「学習発表会」では、児童・生徒自らが主題を設定し、情報を収集・整理・分析・意見交換・協働して進めていく探究的な学習の活動の姿がステージ発表によく表れていた。

(2) 視点２　「学習マップ」の活用

・総合的な学習の時間をはじめとした探究的な学習の場面で、全学年が活用した。

・生徒にとっては、体験したことや収集した情報を探究的な学習の主題と関連づけ思考し、考えを可視化できる有用なツールであった。

・他の生徒が作成したものを見比べることで、他者の気持ちや考えを理解することにつながった。

・教員にとっては、生徒の体験したことや収集した情報を知ったり、発想を把握したりすることにつながった。

(3) 視点３　協働的な学びを発表する場の設定

・グループ学習だけではなく、異学年や保護者、村民、役場の職員との交流など、意図的に協働的な交流や発表の場を設定することで、学びの必然性が高まった。

・「学習発表会」では各学年の発表を、生徒たちが相互に見合い、檜原村ならではの地域の特色を生かした内容の発表の場とし、意図的な交流を行っている。異学年の発表を鑑賞した生徒からは、次年度の総合的な学習の時間の取組を見据えた前向きな意見が出ており、学びを接続する場となっている。

・毎年度、「学習発表会」は保護者と地域の方々を招待している。今年度は村の企画財政課及び産業環境課の職員も観覧し、新たな地域交流の場となった。

２　今後の課題

(1) 視点１　「檜原メソッド」を活用した探究プロセス

「①主題の設定→②情報の収集・分析→③知識・理解の深化→④問題の発見→⑤課題の発見→⑥解決に向けた情報の収集・分析→⑦解決策の提案・実行→⑧振り返り」の細分化した探究プロセスのなかで、本校の生徒は①②③④の内容こそ主体的に取り組むことができるが、⑤⑥⑦の内容に関しては、教職員による支援が必要であると考える。これらの課題解決をしていくには、探究プロセスをより視覚化・明示化していくことや、生徒自身の経験値を積み上げること、学習の取り掛かりにおいて、問題意識や当事者意識を更に高めていく必要がある。

(2) 視点２　「学習マップ」の活用

生徒が主体的に、「学習マップを用いて比較・分析しよう」、「この場面では学習マップを利用した方が探究的に取り組める」という意識を育むことが今後の課題である。この課題解決策として、令和６年度より、各教室に思考ツール一覧表を一斉掲示し、他教科にも広げて活用することで、生徒がより主体的に思考ツールを選択し活用できるようにした。

(3) 視点３　協働的な学びを発表する場の設定

前述した「学習発表会」だけでなく、「学園運動会」や「国際交流会」等の行事を通して、小中一貫校として校内・学園内の児童・生徒との意図的に交流する場をもたせている。しかしながら、他校との合同授業の充実については課題が残っていると考える。今後は、対面やオンライン上での交流に、より力を入れて取り組んでいきたい。また、檜原村の持続可能な未来像に向けて生徒のアイデアや取組を充実させるために、村役場の各部署と交流を更に深めていく。

青梅市教育委員会

１　青梅市の紹介

東京都の多摩西部地域に位置し、東京都の２市３町と、埼玉県の２市の合計７市町と隣接している。多摩川が市内のほぼ中央を西部から東部へ貫流し、北部には入間川の支流である霞川と成木川が流れている。東部の平地から、丘陵地、山地へと変化し、最高点は鍋割山の 1,084 メートルである。管内には小学校が 17 校、中学校が 11 校あり、教職員数は約 600 人、児童数は約 5,200 人、生徒数は約 2,800 人である。

２　管内の学校における教育の特色

(1)　青梅市立第六中学校

丘陵地と山地の合間の盆地状の地に位置し、校舎脇に小川が流れる自然に恵まれた環境の中で、生徒は意欲的に生き生きとした生活を送っている。その中で本年度は、「自主創造」という基本理念、また「振り返る、見通す、やり抜く」という行動目標の下で、「主体性」や「主体的な学び」の醸成を教育方針の重点とし、以下の取組を実践している。

① 地域の「資源」を活用した「総合的な学習の時間」の取組

特有の自然と歴史、文化をもつ地域性を生かした本校独自の学習活動（「青梅学」）により、「主体的・対話的で深い学び」を実践しながら、「持続可能な社会の創り手」を育成する教育を推進している。全体のオリエンテーションでは、異年齢グループを編成し課題発見学習に取り組むなど、様々な場面で学習形態や内容の工夫・改善を図っている。

（学習テーマ：1 年「地域の魅力の発見」、２年「地域の課題の発見」、３年「未来への提言」）

② 地域との連携、協働、交流

生徒参加の防災訓練や青少対主催の「ホタルふやしたい実行委員会」の取組への協力、また地域人材をゲストティーチャーとした講座・講演の開催など、地域との連携を図りながら、郷土、地域、社会全体に対して主体的に関わろうとする態度を育成する活動を展開している。

(2)　青梅市立第七中学校

地域は成木川とその支流の北小曾木川の渓流沿いに位置し、青梅市内の学校で最も広い学区域をもつ。そのほとんどは山林で市街化調整区域に指定されており、人口の流入はほとんどない。生徒数も減少の一途を辿っている。平成 24 年度からは、青梅市立小規模特別認定校として市内の他地域からの通学も受け入れている。周辺地域は自然に恵まれており、成木川流域ではホタルも生息している。地域住民は、学校に対して「おらが学校」という誇りをもっており、とても協力的である。

（「青梅学」地域人材の活用）

地域の教育力を学校教育へと積極的に導入するために、総合的な学習の時間において地域の人材を活用した「森林学習」や「ホタル学習」などを行っている。特に、「青梅学」に関して、地域人材を講師に招へいし、生徒自らが地元の文化や自然を継承しようとする郷土愛を育んでいる。市内の他地域から通う生徒にとっても、青梅を知るきっかけとなっており、全ての生徒が地域のよさを実感しながら学校生活を送っている。

檜原村教育委員会

１　檜原村の紹介

都心からわずか２時間足らずで来ることのできる檜原村は、東京都の西の端にある大自然に包まれた山里である。耳を澄ませば小鳥のさえずり、小川のせせらぎが聞こえ、訪れる人々を楽しませている。また、山々に囲まれ、緑が多く空気は澄み、春は新緑、夏は谷間や樹間を通した涼風、秋は紅葉、冬は幻想的な氷瀑など、自然の恵みを堪能できるのが特徴である。昭和 25 年 7 月 10 日に「秩父多摩甲斐国立公園」へ村の大部分が編入された。檜原村の総面積は、105.42 ㎢で、面積の 93％が森となっており、東京都で 3 番目の広さとされている。

村内には、小学校が１校、中学校が１校あり、平成 23 年に、小中一貫教育校檜原学園檜原小・中学校を開園した。檜原村教育委員会では、村全体で「学びをつないで、持続可能な社会の創り手を育てる」ことを目標に、「９年間の系統性・連続性を意識した指導」「確かな学力を身に付けるための学びのカルテの活用」「小中指導交流の充実」「ＩＣＴ教育の充実」「外国語教育の充実・国際派遣事業」「郷土檜原村についての学習」を推進している。

２　管内の学校における教育の特色

(1)　檜原村立檜原小学校

学区域は村全域と広く、バス通学者が９割以上を占めている。今年度の児童は 59 人、教職員数は 15 人である。檜原学園の小学校として、小・中学校の９年間の学びの連続性を意識しながら、小学校段階から、個に応じた指導の充実を図っている。特に、郷土教育「ふるさと檜原学習」では、村在来植物「ムラサキ」の栽培及び企画・販売などの体験プログラムを通して、児童の主体性を重視するとともに、持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）を意識した教育活動を展開している。檜原村の郷土に根ざし、ふるさと檜原を誇りに思い、大切にする心を育成できるよう、地域・保護者との連携を深め、地域の人材及び素材を生かした教育が特色である。

(2)　檜原村立檜原中学校

村内全域を学区域とし、バス通学者が約９割、自転車通学者が約１割である。今年度の生徒数は 23 人、教職員数は 17 人である。檜原学園の中学校として、小学校同様に 9 年間の系統性や学びの連続性を意識して指導を行い、郷土への誇りを育んでいる。また、卒業後の進学先が村外となる現状を見据え、「職場体験」に力を入れたり、国際理解教育を推進したりするなど、一人一人の生徒に寄り添った細やかな指導を行っている。将来、自らの人生を自分で切り拓く力を育成するためのキャリア教育が特色である。

奥多摩町教育委員会

1　奥多摩町教育委員会の紹介

国指定重要無形民俗文化財
ユネスコ無形文化遺産
「小河内の鹿島踊」

奥多摩町は東京都の北西端に位置し、東京都の約10分の1に当たる225.53平方キロメートルという広大な面積を有する。全域が秩父多摩甲斐国立公園に含まれ、東京の奥庭として親しまれている。その大部分は山岳が占め、町の中心を多摩川が西部から東流している。人口は約4,600人で、水道専用ダムとして東洋一の規模を誇る小河内貯水池（奥多摩湖）を有する、人と自然が調和した潤いのある町である。

また、山村の文化伝承や生活様式が今でも大切にされ、郷土芸能の宝庫といわれている。奥多摩町教育委員会は、次代の町を担っていく人材の育成を課題に置き、知・徳・体の調和のとれた子供の育成を目指している。「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」を柱に、子供たちの「生きる力」を具現化するための施策を展開している。そのために、学校、家庭、地域が連携し、生涯を通じて学び支え合うことのできる地域社会の実現と「町の中と外から関心を持たれる教育のまちづくり」の推進を担っている。

2　管内の学校における教育の特色

管内には、小学校が2校（古里小学校・氷川小学校）、中学校が1校（奥多摩中学校）ある。児童数は約150人、生徒数は約60人である。

全校がコミュニティ・スクールに指定され、保護者・地域住民・教職員の連携を図り、地域と共に、地域に開かれた学校づくりを推進している。奥多摩町の自然や文化等の教育資源を積極的に活用し、学習しており、地域の方との積極的な関わりを通して、各種体験学習を充実させる等、児童・生徒の興味関心を高めるとともに、郷土を大切に思い、地域に貢献しようとする子供の育成を図っている。

また、日常的な交流学習や教員間の情報交換から、小・小連携や小・中連携をより一層強め、確かな学力の定着と個性及び創造力の伸長に向けて取り組んでいる。

奥多摩町だからこそできる学びを重視し、子供たち一人一人が確かな学力を身に付けるために、町全体が一体となり教育活動を実践している。

奥多摩町立古里小学校

奥多摩町立氷川小学校

奥多摩町立奥多摩中学校

東京都教育庁大島出張所

１　大島出張所の紹介

大島出張所は、富士箱根伊豆国立公園に属し、伊豆諸島の北部に位置する大島・利島・新島・式根島・神津島の５島、１町３村（小学校７校・中学校７校）を所管している。

東京都及び管内町村教育委員会の教育目標及び各学校の教育目標の具現化を目指し、東京都教育庁指導部、東京都教職員研修センター、東京都教育相談センター等、関係諸機関との連携を図りながら、管内各校の教育環境や教育の実態を踏まえ、島しょの抱える教育上の課題を的確に把握し、学校教育の充実に必要な指導事務事業を行っている。

２　管内の学校における教育の特色

(1) 大島町

学力向上を目指し、令和６年度より大島町研究推進校が設置されている。小学校１校、中学校１校を指定し、小中連携を視野に入れながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげるために、実践的に研究し、その効果の普及を図っている。

大島波浮港

(2) 利島村

利島小中学校

利島の将来像『生き生きとした活力のある島　自立する村利島』を実現するため、①当事者意識のある人②自立を目指し続けている人③一体感を自ら生み出すことができる人の育成を目指している。「自立」について共通理解を図るために「15 の春自立シート」を作成し、村全体で子供の成長を支えている。

(3) 新島村

幼児・児童・生徒一人一人の新しい時代に必要となる資質と能力を伸ばすことを目的として「新島村連携型一貫教育」に取組んでいる。新島及び式根島の保育園・小学校・中学校・高等学校が、発達段階に合わせて、目指す子供の姿を設定し、系統立てた学習連携・交流の研究及び推進を行っている。また、キャリア教育の視点からは、地域・社会との連携も大切にしながら、「自ら夢を拓く子供」を育むことを目指している。

新島村立式根島中学校

(4) 神津島村

神津小学校から見える
前浜港

すべての児童・生徒の学力向上に重点的に取り組み、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」をバランスよく育成することを目指している。各授業においては、「課題把握→自力解決→学び合い→まとめ→振り返り」を基本とする「神津島村授業基本モデル」を設定し、小学校から中学校までの９年間の学びのルールや指導法を統一している。

東京都教育庁三宅出張所

1　三宅出張所の紹介

三宅出張所は、東京都心から南方約 180 キロメートルの伊豆諸島南部に位置し、三宅島と御蔵島の２島、２村を所管している。管内には、小学校２校・中学校２校があり、児童約 120 人、生徒約 50 人が在籍している。

当出張所では、東京都教育委員会及び管内各村教育委員会、各校の教育目標の実現に向けて、教育庁指導部及び教職員研修センター等と連携しながら、指導事務事業を展開している。

また、児童・生徒の情報活用能力の向上を図るため、「GIGA スクール構想」の確実な実施と「『未来の東京』戦略」に掲げる東京型教育モデルの実現に向け、教育庁総務部デジタル推進課や他の島しょ地区と連携して、教員の ICT 活用指導力の向上を図り、各校の教育 DX を推進している。

2　管内の学校における教育の特色

(1)　三宅村

平成 12 年の噴火による全島避難の影響もあり、現在、村内は小学校・中学校ともに１校ずつとなっている。

三宅小学校

三宅中学校

三宅村では、三宅村立三宅小学校・三宅村立三宅中学校に三宅村立みやけ保育園、東京都立三宅高等学校を加えた「保小中高一貫教育」を推進し、異校種間における教育課程の連携や円滑な接続を図っている。具体的には学力向上、キャリア教育、健全育成の三部会で構成される定例委員会のほか、合同行事を開催している。また、教育研究活動の中核となる教員を育成し、村内の教育の向上を期するために、「三宅村教育研究員」を設置している。令和５年度は、「自ら思考し、表現する児童・生徒の育成」と主題を立て、研究を進めた。

(2)　御蔵島村

村内に御蔵島村立御蔵島小学校と御蔵島村立御蔵島中学校を設置している。島内に高等学校がないことから、児童・生徒は、進学等と同時に「15 歳の旅立ち」を迎えることになる。

御蔵島小中学校

御蔵島小・中学校では、異学年や異校種との合同授業や交流活動等、小中併設校の特性を生かした９年間の一貫性と継続性を重視し、教育活動を組織的・計画的に行っている。また、動植物を始めとする御蔵島の自然環境をテーマとした学習を進め、御蔵島の特色を理解するとともに、島の未来について考える「御蔵みらいの日」を設定している。

さらに、毎月５の付く日には、昭和初期から続く「奉仕日」として、早朝から児童・生徒が、郷土の美化に貢献している。

東京都教育庁八丈出張所

1　八丈出張所の紹介

八丈島は東京都心から南方約 287 キロメートルの海上に位置し、面積 69.1 平方キロメートル、周囲 58.91 キロメートルのひょうたん形の島である。八丈町の人口は 6,795 人、世帯数は 4,100 である。青ヶ島は八丈島の南方約 70 キロメートルに位置し、面積 5.96 平方キロメートルの楕円形の島である。青ヶ島村の人口は 144 人、世帯数は 108 である（令和６年４月１日現在）。

管内には小学校４校（八丈島３校、青ヶ島１校）、中学校４校があり（八丈島３校、青ヶ島１校）、教職員数は 120 人、児童数は 324 人、生徒数は 144 人である（令和６年５月１日現在）。

八丈出張所では、学校及び教職員の抱える様々な課題に対応するために、管内の小・中学校において東京都教職員研修センターによる都教委訪問や島しょ地域研修支援事業を活用し、喫緊の教育課題や各校の要望に応じた研修機会の充実を図っている。

本年度は、八丈町教育委員会、青ヶ島村教育委員会と連携して、オンラインを活用した八丈町と青ヶ島村の教員が共に学べる場を設定し、デジタル教科書の活用や教育ＤＸの活用に関する研修を設定するなど、教育課題への対応力の強化や個別最適な学びと、協働的な学びの実現へとつながる教員の資質・能力の向上に向けた支援を行っている。

2　管内の学校における教育の特色

(1) 八丈町立学校における特色

左：八丈小島　右：八丈富士

島の中央部に当たる八丈富士と三原山の間は、島の経済活動の中心地であり、島全体の児童・生徒の８割以上が居住している。住民の連帯感は島全体で強く、学校教育に対して協力的で、学校行事への地域住民参加も積極的である。

八丈町の学校は全校単学級であるが、小規模校の特性を生かして、児童・生徒一人一人の理解度に合わせたきめ細かな指導を行っている。

また、各小中学校ではデジタル技術を学習活動に活用し、児童・生徒が自ら学び方を選択し、自立した学習者になることを目指した授業づくりについて研究に取り組んでいる。

(2) 青ヶ島村立学校における特色

青ヶ島小学校は明治７年１月15日に、青ヶ島中学校は昭和22年４月１日に創立された。村の人々にとって、古くから学校は特別な存在であり、その意識は現在も続き、学校教育に対して協力的である。また、地域で子供を育てるという風潮がある。

青ヶ島全景

総合的な学習の時間で、小学校では、島の特産であるかんも（さつまいも）を育て収穫する活動、島の動植物等について学ぶ学習、中学校では、これからの青ヶ島の自然・歴史・暮らしに関する課題解決学習に取り組んでいる。

東京都教育庁小笠原出張所

1　小笠原出張所等の紹介

父島二見港

本出張所は、多くの関係者の皆様の御尽力により本年（令和６年）４月に開設した。所長、副所長、職員３名の計５人体制である。総務局小笠原支庁内に事務所を置き、教職員研修の企画・運営、教育に関する事務の指導・助言のほか、管内小・中学校の教職員の人事、教職員住宅の維持管理、社会教育の振興、村内文化財の保護等に関する事務を行っている。

小笠原諸島は、都心から南に約 1,000～1,800km の太平洋上に散在する 30 余の島々で、一度も大陸と陸続きになったことのない海洋島である。人々が暮らしているのは父島（約 2,000 人）と母島（約 400 人）で、硫黄島や南鳥島には、自衛隊員や気象観測員等が常駐している。

現在、父島では小笠原小・中学校校舎の建替え事業を進めている。本事業完了後には、全ての村立学校が施設一体型の校舎となる。

2　管内の学校における教育の特色

(1) 小中一貫教育の推進

小笠原村教育委員会では、小中一貫教育の一層の充実を教育施策の中心に据えて取り組んでいる。設置２年目を迎えた「小笠原村立学校小中一貫教育推進協議会」を中心として、下部組織に三委員会（小中一貫教育研究推進委員会、デジタル教育推進委員会、義務教育学校準備委員会）を設け、村立学校に所属する全ての教職員による小中一貫教育推進体制を確立している。

昨年度から母島小中学校を「小笠原村立学校小中一貫教育研究推進指定校」に指定し、令和７年２月７日（金）にオンラインによる研究成果発表会を実施する予定である。

また、各校では、義務教育９年間の体系的な学びの実現を目指し、各教科等の年間指導計画を「内容のまとまり」ごとに再編する作業に取り組んでいる。

(2)「小笠原学習」の取組

母島沖港

従来から単発的に取り組まれていた地域学習を令和４年度から、「小笠原学習」としてまとめ、中学校卒業時までに育てたい児童・生徒の姿を資質・能力の視点で具体化するなどして、その体系化に取り組んでいます。小学校第１学年から学年ごとにテーマを設け、生活科や総合的な学習の時間を中心に学習活動を展開している。

今年度末までに、村立学校各校の全学年で各教科等の年間指導計画に基づいた「小笠原学習」単元配列表が完成する予定である。カリキュラム・マネジメントの視点にたってＲＰＤＣＡサイクルを回し、活動内容や指導計画等の改善・充実を図りながら、未来の小笠原村を担う人材に求められる資質・能力の育成に取り組んでいる。

令和６年度　へき地・小規模校教育研究発表会
第 27 回研究発表会資料

東 京 都 教 育 委 員 会
東京都へき地教育研究協議会
令和６年８月

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電 話 番 号　０３－５３２０－６８６９